

IROM BOOK

間違ってしまう男	2
息子のマシン (前編)	4
息子のマシン (後編)	6
青い惑星	8
出来上がった薬	10
休暇	11
露店商	12
うどん	18
帰ってしまう宇宙人	22
記憶喪失	23
WEBの糸	24
調査員	28
へそ	35
童話	38

間違ってしまう男

リンスで頭を洗ってしまうなんてのは大したことではない。誰だって経験はある。

だが、その男はちょっとちがった。

男はいつもいつもリンスで洗髪をするのだ。

風呂に入って、さてシャンプーをしようと思う。ボトルが二つあって、片方がシャンプーでもう一方がリンスだ。

何気なくボトルをつかむと、それはまちがいでなくリンスなのだ。この前まちがったからこっちがシャンプーだ、と持ちかえた場合、やっぱりリンスのボトルをつかんでしまう。

こっちか、こっちか、いや、この前は色々考えすぎたから失敗した。絶対こっちだ。そう思って使った場合いつもリンスだったからこれではない。こっちがシャンプーなんだ。

使ってみるとリンスだ。

なぜなんだ。

そんなものまちがうはずはない。ボトルに印刷されているから分かるはずだ。たしかにそうなんだが、男は次々と出現する商品名を覚えることができなかった。

リンスのいないシャンプーだとか、リンスなのにシャンプーもできるとかいうコマーシャルがよけいに頭を混乱させていた。

ボトルにマジックインクで区別を書くことを思いついたが実行していない。

そんなことをしたら妻と娘にまたばかにされる。男はリンスで洗髪してしまうことを家族には黙っていた。

しかし、リンスでばかりでシャンプーしているわけではない。

ある夜、男は確実な手応えを味わった。

風呂に入ってさて洗髪。いつもの試行錯誤の末、ボトルをにぎる。ゴシゴシ。おお、泡が出てるぞ。俺はまちがわずにシャンプーを使っている。ゴシゴシ。これぞシャンプーの醍醐味よ。ざまあみろ。

妻よ、娘よ、俺はついにシャンプーでシャンプーをした。今日をシャンプー記念日と名付けてあげよう。ゴシゴシ。

この快感。口笛ふいてホラエーホラオー。男は風呂の中で歌い出した。

シャンプーてのは妙に髪の毛がギシギシになるな。洗浄力が強すぎるのではないか。妻よ娘よ、こんなもので毎日シャンプーしてたら髪の毛が痛むぞ。娘は朝も洗ってるではないか。ちょっと注意したほうがいいな。と、優しい父親をきどってみたりしながら。ゴシゴシ。洗髪に精を出した。

男の頭で泡を立てているのは風呂釜を洗う洗剤だった。

シャンプーとリンスの区別がつかないくらいなら、他にも何かとんでもないまちがいをしてるんじゃないか。

その通りである。

食器用洗剤でも頭を洗った。

トイレの洗剤でも頭を洗った。

チューブ入りの洗顔セッケンで歯を磨いた。

液体歯磨きを飲み干した。チューブ入りわさびを肛門に塗った。

チューブ入りおろししょうがを肩に塗った。これは肩こりに効いたようだ。

水虫の薬を目にさした。

仁丹も目にさした。目薬でたばこに火をつけようとした。つかなかった。

新グロモントでうがいをした。

ラッカー塗料を頭にスプレーした。金色だった。

ひややかにコーラをかけた。

すり傷にタバスコをすり込んだ。痛くて泣いた。みりんで整髪した。

チーズで手を洗った。

バスクリンでお茶漬けをした。

殺虫剤を両脇にスプレーした。

小麦粉で洗濯した。

しっくいであこ焼きをつくった。そして食べた。

ナフタリンで水割りを飲んだ。

ビー玉をかみ砕いた。

機械用グリスを食パンにぬった。ぬってから焼いたのでパンが燃えた。

胃薬を即席ラーメンに入れて食べた。その後、ラーメンの粉スープをそのまま飲んだ。

小袋の底を中指でコンコンとたたいて、くっついていていた粉末を咳き込みながら飲み干した。そして「良薬口にからし」とかなんとかつぶやいた。「にがしだったかな」と付け加えた。

男は45才であった。

息子のマシン(前編)

息子のやろう、またタイムマシンを買ってきやがった。

だいたいこの数年の間、おもちゃのメーカーがタイムマシンを売り出すようになってから小遣いはほとんどそれに使ってる。これで、もう3台目だろうが。

そういえば、父さんがタイムマシンの免許をとったのは20歳過ぎだったかなあ。あのころはマシンも高く中古を買った。中古といってもボーナスでやっと半分支払っただけだもんな。

いやもう、とんでもない時代になったものだ。あいつが中学に入学する時に、どうしても欲しい、友達はみんな持ってるとかでしかたなく買ってやったもんだ。それがなんだ、高校生になってアルバイトを始めたのはいいけど、その金をみんなタイムマシンに使ってしまうとはな。

おもちゃメーカーが販売してるといったって、最近のマシンは腰をぬかすくらい高性能だ。もともと過去行き10年、未来行き10年という制約がついてる。それだからこそ免許がいらない。それなのに、どこかのメーカーがタイムアクセラレータとかいう名前で100年のタイムトラベルが可能なオプションを作った。そいつを取り付けるとスッ飛びマシンになる。よく分からんが、こんなオプションは法律にひっかかるんじゃないのか。

しかしまいった。父さんが旅行の時に使う4人乗りのマシンは50年しかいけないのに。しかも加速がわるい。父さんも新しいのが欲しいよ。

あ、そうそう。息子のもってるマシンは一人乗りなのに、彼女かなんか知らんが時々二人でトラベルしたりしよる。ばかもんが。色気付きやがって。また、検問で捕まるぞ。反則金を払うのに母さんから金をもらってるのを父さんはちゃんと見てたぞ。

おいこら、どこへ行く。や、またトラベルか。もう夜も遅いのに、宿題はしたんか。え、こら。

行ってしもた。また彼女とデートか。2098年へ行くんだろ。どうも2098年の8月3日には高校生のタイムトラベラーが集まる広場があるらしい。週刊誌で読んだことがある。不良が集まってるんじゃないのか。そこで宿題をするだと。

あほらしい。嘘をつくならもっとマシな嘘をつけ。それより彼女とはどんな関係なんだろうか。あんな事したり、こんな事したり。いやんもうばか。あはは。

あっ。母さん、今の聞いてた？ そう。失礼しました。

おれは若者の性について真剣に考えてるんだ。

エッチもいいけど妊娠したらどうするんだ。子供を生むときは現在で産めよ。とか言ったって息子が産むわけじゃないんだから、今度彼女に会ったらちゃんと言い聞かせと

かないとな。タイムトラベルしてる最中に赤ん坊を産んだら手続きがとんでもなくやっかいだからな。だいいち赤ん坊の年がマイナス15歳とかになったらどうする。5歳で成人式に行くのか。

まだマイナスならいい。過去で出産したら生まれてすぐに70歳てな具合になるぞ。その赤ん坊が女の子だったとしましよいな。それでまた器量好しの別嬪さんになったとしましよいな。ね。いくら別嬪さんでも、いわゆる年頃になって95歳の女と結婚してくれる男がいるか。ええ、そうだろ。

だから、おもちゃのタイムマシンは青少年を破滅に向かわせる機械なんだ。

おれも、なかなかいいこと言うだろう。な、母さん。おい、母さん。

あっ。

なんや、寝てるんか。

息子のマシン(後編)

「だってオヤジ。半年前に買ったタイムマシンなんか、かったるくて走れねえよ」

「そうか」

「そう、あのポンコツ、エンジンがt486だけ。今はもうt686の時代だ。t686はタイムアクセラレータに対応してるんだ。アクセラレータを積むと3倍のスピードになるし、過去未来とも200年のトラベルが出来るんだ」

「えっ100年じゃなかった？」

「違う200年対応がこの春に出たよ」

「そうか。で、買ったのか」

「あぁ買った」

「時間交通法という法律があるのに、そんなモノよく販売する事ができるな。おまえの乗ってるのはホビークラスだから10年だけじゃなかったか」

「さあ、法律の事はよく分からない。分からないけど、200年対応のタイムマックはコンビニで売ってるんだぜ」

「何だ、そのタイムマックというのは」

「タイムアクセラレータのことだよ」

「ああ。そういえばテレビでタイムマック200ってコマーシャルしてるな」

「オヤジ、知ってんじゃない」

「ありがと。そんなことはどうでもいいんだ。おまえにちょっと話しがあってな」

「話し？」

「そう」

「マシンの話じゃなかったの」

「いやマシンもそうだけど。彼女のこと……………」

「彼女？」

「そうだ、おまえの彼女」

「ああケニーのことね」

「け。け。けにい」

「そうケニーだよ。かわいいだろ」

「外国人か？」

「何言ってんの外国人なんて古い言葉なんか使って。ケニーは2111年で知り合ったんだもの。国籍なんてないよ……………。おいオヤジ、なに気絶してるの。大丈夫か。」

「パシ！」

「いて。だ、大丈夫だ。父さんは大丈夫だ。それよりな、おまえ彼女となにか、あの、あれ、その、あんなこと」

「なに赤い顔してるの。あれ、それってなに」

「あはは。ズバリ言うとセッ、セッ、セッ。セック。」

「セックスか」

「わ、はっきり言うな。それだ、それ。したのか」

「したよ」

「わ、そんなこと。高校生のくせに」

「高校生であろうが、中学生であろうが性的成熟があれば当然のことだろ」

「性的成熟なんて難しい言葉をつかいよって、おまえ、子供ができたらどうするんだ。その子供が女の子だとして、そして年頃になって結婚しようというとき95歳だなんて、ああ、だめだだめだ。だめだ」

「なんだそれ。なにを訳の分からないこと言ってるの。どっちにしたって子供なんかできるはずないよ、バーチャルだから」

「バーチャルってか」

「そう」

「何だそれ。体位の名前か。それとも避妊の器具か」

「馬鹿かオヤジ。バーチャル知らねえのか」

「知らん」

「バーチャルってのはね、バーチャル・リアリティのことだよ。僕たちは周りの環境から五感に受ける刺激を通じて周囲の状況を知覚するわけだろ。バーチャル・リアリティというのは人工的に視覚・聴覚・触覚・味覚・臭覚などに刺激をあたえることによって現実とは異なった空間、時間を擬似的に体感するものなんだ。仮装現実感とか日本語で言ってた時期もあった。聴覚は昔っからオーディオで生かされていたし、視覚は3Dの技術でこの現在でも使われているだろ。難しかった触覚と味覚は2050年頃には完成されてゲームなんか採用されたりした。僕がケニーと知り合った2111年ではセックスも体を重ねるようなことはしないのが普通だ。バーチャルセックスは、ちょっとしたコミュニケーションの手段だよ。挨拶みたいなもんだ。だからオヤジ、子供ができるはずがないのは分かるだろ。もし、僕たちに子供が出来たとしても時空調整異動届をセンターに届けたら、その子の歳、僕たち歳も整合性のとれた計算をしてくれるし、どの空間に住んでもつじつまのあう時間調整をしてくれる。空間移動におけるパラドックスなんて問題もなく解決されるよ。だからオヤジそんなに心配しなくても……。なあ、オヤジ……。なんだ、寝てんのか」

青い惑星

ボクはとても長い間宇宙をさまよっていました。

銀河系冒険ツアーというのに参加したのですが自由時間の時ボクははぐれてしまったのです。

今乗ってるこの宇宙船はボクが死ぬまで走り続けるだけの燃料が積んであるので宇宙空間に沈没することはありませんが、食料が残り少なくなってきました。どこか適当な惑星があればそこで食料を探したり休憩したりできるのですが、どこまで行っても黒い空間ばかり。遠くには光る星がいっぱい見えましたが、ボクの乗ってる宇宙船ではとても行けそうな距離ではありません。もう信じられないくらい退屈してしまいました。ボクの食料は鉄です。どこか近くに鉄のある星はないのでしょうか。

そんなことを考えながら、ボクは残り少なくなった宇宙食の即席鉄をかじっていました。すると、なんと光る星が近づいてきているのではないですか。こんな近くに光る星があるなんてラッキーです。たぶん惑星を従えているでしょう。行ってみることにしよう。食料がある惑星があればいいんだけど。

惑星はありました。9個くらいあります。みんな小さな惑星でした。外側から順番に5個くらいの惑星を調査して行きましたが岩石だけとか濃い大気があるだけで食料になる鉄なんてありません。だめです。でもあきらめるのは早い。もう少し探そう。

ボクは青色の惑星に行ってみることにしました。表面がほとんど水の星でした。ボクは陸を選んで観察しました。するとどうでしょう。鉄です。ボクの大好きな鉄がいました。しかも、とても元気な鉄です。赤、青、黄、白。生きのいい鉄が行列を作って走っているのではないですか。

ふるさとからこんな遠く離れた場所で生きた鉄に巡り会えるとは感激です。お腹が鳴りました。ちょっとよだれも出たかもしれませぬ。

ぼくは急降下しました。宇宙船から降りて、なりふりかまわず生のまま鉄を食べました。鉄は行列をつかって走っているのだから食べやすかったです。即席鉄ばかり食べていたので生鉄のうまさは格別です。舌をだすと10匹、20匹がくっついてきて口の中でピチピチする。うわー、うまい。それに化石燃料の味もする。とってもジューシー。ぺろんぺろんと舌で巻き取って食べました。食べてる間に気がついたのですが、この鉄には寄生虫がいるらしく、その寄生虫がこの味を引き立ててるようです。寄生虫は必ず1匹はいる。2、3匹の時もある。たまにいるちょっと大きめの鉄には30匹くらい棲み着いてたりする。

ああ、うまい。ぺろんぺろん。もう、千匹くらい食べたかな。鉄のやろう、ほとんどどっか

に逃げていなくなってしまったけど、まあいいやお腹もいっぱいになったことだし。

ぼくは仰向けに寝転がりました。

青い色の空でした。

あれ、空にも鉄が飛んでる。すごいなあ。天国みたいな惑星だ。極楽極楽。ボクはここでずっと過ごすことになるんだろう。ツアーではぐれてしまったけど、こんな惑星なら棲んでもいいぞ。

いて、何するんだ空飛ぶ鉄のやろう。ボクに攻撃する気が。いっぱい集まって来やがった。よく見たら、それは鉄ではなくアルミニウムやジュラルミンの生き物だった。ボクの近くまできてダダダダッって目にも見えないような小さな粒をボクに打ちつけてる。ちょっと痛い。

ぺろん。

あはは、食べてやった。うん、これもなかなかいける。珍味だ。ボクはアルミニウムはあまり好きじゃなかったけど、ここのはなかなか旨い。ジュラルミンも香ばしい。もう、最高。ボクの住んでたアrikui星にはこんな旨いものはなかったぞ。青い惑星は美味の星か。ボクは満足して眠ってしまいました。

目をさましたのはシュワッチという大きな声がしたからです。目の前にはボクと同じくらいの大きさの体をした奴がいました。赤と黄色の服をきていてる。ちょっとだけ見えたんだけどそいつの背中にはチャックがついていた。突然そいつはボクを殴りました。ボクは舌でぺろんと反撃しましたが、今度はキックされました。

何も悪いことをしていないのになぜなんだろう。

そいつは無表情な顔をしたまま蹴るは殴るは投げ飛ばすはでボクは、とことんいじめられました。ついに意識がもうろうとしてきました。ボクはこの星で死んでしまうのだろうか。いじめっ子の胸にはランプがついていて光りながらピコピコと音がし始めました。音がしだすと急にあせりだして、黄色い光線をボクに発射したのです。

うわー、死んじゃうよ。なんでボクはこんな目に会わなきゃいけないんだ。

どて。

出来上がった薬

「博士、ついにできたんですね」と助手は言った。

白いあごひげをはやした初老の博士はうなずいた。「ああ、やっと出来た、ありがとう。君が手助けしてくれたお陰だよ」

「とんでもないです。博士の才能と努力の結晶です。念願の薬が出来て本当によかったです」助手は感激して泣き出した。博士も涙ぐんでいた。

完成したその薬は一種の精神安定剤だった。この複雑な社会の中で総ての人の心は病んでいた。苦しみを背負い生きていく、そんな人々が増えすぎてしまった。

博士はこれを救う薬を作ろうと考えた。もう半生をこの仕事にかけてきた。

最初からこの仕事はうまく行かなかった。苦労ばかりがつづいた。だけど博士は人々のためにと休むことなく研究をつづけた。投げ出したくなったことは幾度とある。

人間の精神を薬で治癒する難しさを幾度も知り、博士はついに苦しみを忘れさせる薬を作り上げた。

「本当に苦しい日々が続いたが、これで私の仕事も一段落した、これからは君に後を引き継いでもらう」

「はい、わかりました。今まで詳しい調合の方法は教えていただけませんでした。ボクにも教えていただけるんですか」

「ああ、今からでも君に総てを伝授するよ」

「はい、それではさっそく教えて下さい」

「……………忘れた」

休暇

目覚まし時計がなった。7時だ。

ああ、もう朝がきたか。会社に行かなければならない。どうしておれは人間なんか生まれ生きてきたんだろう。牛にでもうまれてりゃもっと自由に、朝だって10時頃までごろごろ寝てられるのに。腹がへったらその辺の草をムシャムシャ食べればいい。昼寝をしたけりゃごろんと寝ころべばいい。ああ、牛はいいな。できるなら牛になりたい。だけど現実にはきびしい。なんだかんだ文句をいっても会社へ行かねばならん。

「ちくしょう、もーっ、牛になりたい」と思わず叫んだ。

するとおれは牛になってしまった。

た、た、た、大変だ。牛になっちゃったよ。どうしよう。顔を洗うこともできないよう。こんなヒズメで歯ブラシが持てるかよ。えらいことになってしまった。牛になりたいなんて思ったもんだからホントに牛になっちゃった。このまま会社へ行ったらみんななんて言うだろう。営業の田島のやろうは「お、おまえ牛になってしまったか、いつもノロノロと仕事するからだ。あはははは牛になった、牛になった」とか言って大騒ぎをするだろう。それより受付のルミちゃんがおれを見たらどう思うだろう。まずいよ。牛なんてかっこわるい。

休暇だ。

そして今日で三日間、会社には行っていない。風邪で熱があると連絡してある。おれはずっと牛のままだ。

一日中テレビばかりを見ている。

昼のワイドショーを見ていたら、北海道の牧場で草を食べてるおかしい人間が報道されていた。全裸の男だ。四つん這いになって牧草を喰っているではないか。

まいったな。よく見るとその男はおれだった。

露天商

小学二年生になる俺の息子が小さなカメを買って来た。
学校の帰りに露店商で買ったらしい。黒いカメだ。
イシガメとかなんとか言うのだろう。
息子はそいつを水槽で飼っていた。中に石や砂利を入れ、水を少し張ってある。
まあ人間で言えば六畳 間という狭い室であるが、そのカメは水槽の中をがさごそと走り回ったり、せわしげに泳ぎ回ったりしている。なかなか元気がいい。
カメは何でもよく食べた。野菜の残り屑。魚のアラ。米のめし。炊いてあろうが焼いてあろうが何でも食べた。
俺の妻も息子と 一緒にかわいいいわねえなどと言いながら食パンをやったりしていた。とにかく何でも食べた。そのぶん、どんどん大きくなる。普通、露店で買ったこういう小動物というのはすぐに死んでしまうものだが、こいつは違っていた。めっちゃや元気である。それよりも成長のしかたが異常である。買って来た時はマッチ箱ほどの大きさであったのに 週間で俺の掌くらいになった。これはイシガメなんかじゃないな、南米産のカメだろうか。まあ、あっちにはいろんなカメがいるからなあ。
しかしこんなに大食いで成長のはやいカメなんて今まできいたことがない。
そういえば足がみょうに長い。
おかしいなと思ったが、こんなことを妻に言ってみたってしょうがない。だいいち俺の妻はこういう動物に関しての知識が全くない。妻に言わせればイモリでもヤモリでも特別天然記念物のオオサンショウウオでさえトカゲなのだ。野原にいる虫はクツワムシでもキリギリスでもみんなバツと呼ぶ。ましてカメなんぞは海ガメと、その他のカメという区別しか彼女にはない。だから、息子が買って来たカメがどんなに成長がはやかろうが手足が長かろうが知ったことじゃないのだ。
妻がそうであるからして小学二年生の息子にその異様さが分かるはずがない。カメは一日一日、目に見えて大きくなっていく。
こいつはいったいなんだ。
アサガオのツルじゃあるまいし、梅雨どきのタケノコじゃあるまいし、こんなにどんどん大きくなっていいものであろうか。
大きくなって喜んでいるのは息子だけであった。俺が会社から帰ると、息子は必ずカメを水槽から出して畳の上で 一緒に遊んでいる。夕食の時もカメと 一緒に食べるんだと言うまつ。さすがにこれに関しては妻に怒られてカメと食事を共にする事はなかった。

しかし、食事がすむと 一緒に風呂にはいるし、夜の十時頃までその八虫類とテレビを見ている。その時のカメは息子に抱かれて煎餅をかじったりしている。

息子は自分の最たる友人のごとくカメを可愛がった。カメも異様であるが息子も異機であった。

そうこうするうち、カメはまたまたでかくなった。水槽の中に入れると動くスペースがない。そして、例の長い足を使ってすぐにはい出してくる。

その時のカメは、なにか笑っているような顔をした。無気味だった。その頃からカメは息子と同じ布団で寝るようになった。

息子がカメを買ってきてから三週間ほどたった。

その日は日曜日であった。朝の早くから息子はカメと遊んでいる。時々何か話しかけたりしている。

カメと話しができる。まさか、いくらなんでもそれはないだろう。俺は起きたばかりで、コーヒーを飲みながらその光景を見ていた。カメは甲羅が 40 センチ以上ある。最近、特に成長がはやくなったようだ。前にも増して足が長く見える。

こんなものをよくも家の申で飼ってるもんだ。息子はあんなに喜んでいるが、これ以上大きくなったらたまったもんじやない。食事だってばかにならない。大人の 人分は喰ってるだろう。いや二人分は喰ってるだろうか。可哀想だが近いうちにどこかの川に捨ててこよう。それにしても無気味なカメだ。

そういえば頭の形がカメらしくないな。どこかニワトリに似ているし、頭、足、尻尾が妙に白っぽくなってきた。

底に残ったコーヒーをぐいと飲みほし、散歩にでも出かけるかと思った時、俺はカメが二本足で歩くのを見てしまった。カメが立って歩いた。なんてこった。前足でひょいっと反動をつけて立ち上り、ひょこひよこひよここと豊 枚分くらいを歩いた。歩いた。あるいた。カメが歩いた。二本足で歩いた。ひよこひよこ歩いた。俺はうわ言のようにつぶやいていた。「お、おまえ。このカメ。学校の、か、帰りに。買ったと言ってたが。いったいどこで買ったんだ」

「学校の帰り」

「そりや分かってる。いったいどのへんだ」

「分らない。忘れた。道ばたで売ってた」

「忘れたって、おまえ。まあいい。それじゃ、どんなおじさんが売ってた」

「分らない。忘れた。忘れたけどカッパみたいな顔をしたおじさんだった。おじさんじゃなくっておにいさんだったかもしれない」

「カッパみたいな」

「そう」

俺はあらためて今息子に抱かれている、でかいカメを見た。

カッパ。かっぱ。河童。こいつはカッパだ。絶対にカッパだ。間違いなくカッパだ。

「カーッカッカッ」

「なに言ってるの、おとうさん」

「カッカッカッ。カッパだあ、そいつはカッパだあ早くすててこい。化けもんだあああ。

わあ。こっちへつれてくるな」

「このカメは化け物じゃないよ」

「わ、わかった。わかったから、あっちへつれて行ってくれ」

二階のベランダで洗濯物を干していた妻が俺の大声をきいて階段を降りてきた。

「なに言ってるのよ大きな声で。そのカメがどうかしたの」

「カメじゃない。カッパだカッパ。そいつはカッパなんだ」

「あ、そう」

そう言うと妻はまた洗濯物を干しに二階へ上っていく。そして階段の中ほどに立ち何か考え事でもしているようであったが、ぎゃああという悲鳴と共に階段をころげ落ちてきた。その時その怪物は俺の顔を見て、にやっと笑った。

それからまた 週間。

そいつは完全にカッパになった。

体はひょろっとしていたが身長は俺より少し低いくらいで、この分だと二、三日で追い越されてしまうのではないだろうか。そうとうに知能が発達している。俺の服を勝手に箆笥から出して着ているし冷蔵庫の食べ物も勝手に食べる。テレビも勝手につける。しかも、好んで二ニュースを見るのだ。

時々「ぎょぎょ」という気持ちの悪い鳴き声を発する。そして、なにもする事がないと昼寝をしている。

カッパは外へ出ない。ずっと家の中にいた。お客が来た時は押し入れの中に隠れる。

なぜか俺達家族以外には顔を見せようとしなかった。

なんとかしてあいつを追い出さなければと思った。

無理であった。

どうして追い出そうかと妻に相談をしていた時なんか、カッパはそうっと音もたてずに近ずいてきて俺の顔をじっと見つめた。

ぼくを追い出そうとしてもダメだ。やるならやってもいいが、後でどんなめにあうか知らないよ。カッパの目はそう言った。

警察に電話をしようとした時もそうだった。後ろから忍び足で近ずいてきて、ぬっと顔

を出すのだ。あの目を見てしまうと体が震えて力が出なくなる。カッパは魔性の目をしていた。

あいかわらず息子とは仲がいい。

困ったものだ。仲よくするなら人間と仲よくしてくれ。あいつは化け物なんだ。息子は化け物の手先になったのか。

時々ひそひそと何か話している。やっぱり息子はカッパと会話ができるらしい。どんな話しをしているのか分らない。俺とか妻の前では、ただ無邪気にふざけあっているだけであった。

だれか助けてくれ。このまま呪われた生活がつづくのであれば俺達がこの家を出ていくしかない。いや、そんなことをしたってこの化け物は俺達にどこまでもついて来るにちがいない。

カッパがいなくなった。

あの悪夢のごとき生活がこんな結末で接わろうとは思っていなかった。突然いなくなった。

なぜだ。

ばかな、そんなこと考える必要があるか。とにかくカッパはいなくなったのだ。

俺の上下の背広とワイシャツが無くなっていた。たぶんあのカッパが着ているのだろう。あのカッパが警察につかまって、着ているものが俺の服だと分かったとしても総て今までのいきさつを話せばいい。信じてくれるか信じてくれないかは、またその時のことだ。どっちにしたってあの化け物はこの家からいなくなった。もうあの悪魔のような目を見ることはない。妖怪のごとき笑い声を聞くこともない。

ただ、カッパがいなくなって息子がどんな行動をとるかが心配であったが、不思議な事に息子はそんなに驚かなかった。カッパが突然、姿を消したのに割と平然としている。息子はあっちこちの室を探し「カッパ、いなくなったね」と言った。ただそれだけであった。泣きもしなければ、必要以上に探し回ることもしなかった。

化け物であったが、あれでも息子の友達だったのだ。それなのに。いや、これも深く考える必要はあるまい。何がどうであれカッパはいなくなったのだ。家庭に平和がもどったのだ。

だがさてよ。息子が小さなカメを買ってきてから ヶ月間、悪夢のまっただ中にいるときは考えてもみなかったが、露店でカメを買ったのはうちの子だけではないはずだ。学校帰りの道に店を出してたというからたくさんの子供が買ったにちがいない。その家庭ではどうだったのだろう。そのカメはやはりカッパになったのだろうか。うちと同じよ

うに恐ろしいめにあったのだろうか。それとも、うちの子がたまたま 匹まじっていたカッパを買ったのだろうか。

息子にきけば分かるかもしれない。

しかし、息子に尋ねるのはためらいがある。カッパと仲のよかった息子を思い出すと怖くなってしまう。せっかく"普通の子供"にもどったのだ。今さら、またそろカッパの話「をすることもないだろう。それこそ寝た子を起こすという言葉どうりになってしまうではないか。この町に何匹ものカッパがこっそりと棲みついているなんて想像しただけでも背中が寒くなるが、だからといって俺に何ができるというんだ。俺の家庭が平和であればいい。俺の家族が幸せであればいいじゃないか。そうだ、俺の考えのどこが間違っているんだ。

これでいい。他の家庭のことなど心配することはない。

カッパのことなどほとんど忘れていた。

思い出す時があっても恐怖と共に記憶がよみがえってくるということはない。あれは本当に夢だったのではないか。

あんな馬鹿げたことがこの世に有り得るはずがない。このハイテク時代にカッパなどという空想の漫画ごとき生物がいるはずがあるか。

俺の頭の中には確かにあのいやらしいカッパの姿形は記憶されている。だけど毎日会社で忙しく働き、今こうして満員電車で揺られながら我が家へ帰っているごく普通のサラリーマンにとってはあんな奇っ怪な出来事は"嘘"とか"冗談"に変形しなければならなかった。

普通のサラリーマンが普通のサラリーマンであるためには異様な体験は不必要であり、邪魔であった。俺は無意識のうちに、そして強制的に自分を普通のサラリーマンに仕立てあげているのだ。これも我が身を守る人間の本能であろう。妻は妻で、忙しく家の仕事をやることで"普通の妻"になれるのだ。以前、俺の家にはカッパが棲みついていただって?そんなばかな。嘘だ。ジョークだ。

俺はどこにでもいる普通のサラリーマンだぞ。どこにでもいるこんな平凡な人間には平凡な人生が与えられていてこの平凡こそが幸せというものなんだ。俺は時には仕事の不満も言う、ごく普通のサラリーマンとして自宅の最寄り駅を降りた。そして、ごく普通のサラリーマンとして、他のごく普通のサラリーマン達と同じように我が家へと足を向けた。

駅前の商店街を抜け、信号を渡った。

あの男は今日も同じ場所で店を出していた。

三日ほど前から男はここで露店をやっている。たくさんの水槽を歩道にならべていて、

その周りには子供達が集まっている。

水槽の中にいるのは黒いカメだ。

その露店商の男は、俺のシャツと俺の背広を着ている。

そのカッパのような顔をした男と目が合いそうになった。俺は急いで顔を伏せた。

そして俺は、ごく普通のサラリーマンとして、その場を通り過ぎた。

うどん

「へい、いらっしやい。何しましよ、おにいさん」

「あの、天ぷらうどんお願いします」

「へい、テンソいっちよう」

「あの……」

「なに？」

「天ぷらそばじゃなくて天ぷらうどんなんですが……」

「……あっ、あは、あはははは ・ 天ぷらうどんね、天ぷらうどん。へえい、へいへいへいへい。ごめんなさいよ、おにいさん」

「……いいえ」

「へいへい、しばらくお待ち下さいよ……。あっ、へえいへいへい。どうぞどうぞおねえちゃん、へい何しましよ。え、親子どんぶりでっか。へいへい、おねえちゃんに親子いっちよう。……おねえちゃんOLでっか？ え？ 違う。ほんなら学生さんでっか。そうでっか、こりや失礼。いやあね、この頃の娘さんてのはどうも齡が判らんでねえ。学生さんでも妙に色っぽいから、ほんまに。で、どこの大学で……。え？ いや、大学生とちゃう。ははあそうでっか。え、いや、何と、高校生。高校生でっか。そうでっかいな。いやもうごつい別びんやよってに、ついもう、いやいや、なんとも、あはははははは」

「あ、あのう……すいません。ぼくの天ぷらうどんは……」

「ん、あ、そうそう。おにいさんの注文ね。遅いでんな……おおい、おにいさんの、ええと……ざるそば、おおい、ざるそばまだできんか」

「あの」

「何？」

「あの……天ぷらうどん……」

「え、天ぷらうどんでっか。注文変更ね、いいですよ。おおい、ざるそば取消して天ぷらうどん頼みます……いや、しかしねえちゃん別びんやからオトコによもてまっしゃる。ええな、若いむすめさんは、こう、もう何ちゅうか。あは、あは、あははははははははははははははは。いやそんな怒った顔せんといてえな。怒った顔がまた色っぽい、な。いひ、いひ、あははははははは……。おねーちゃん。あは、あは、……おとととと親子どんぶりやったね。へい、お待ちど。お、お、お、白い可愛いおてて。さわつたるか。えい、ちゃん。あっ、ああ……、おこわ。そない怒りないな、……怖い怖い」

「……あのう……ぼくの……」

「何？」

「天ぷら……」

「ほいほい。分ってますがなおにいさんできてまっせ、天ぷら定食。へい、お待ちど」

「あの」

「何？」

「うどんなんですが……」

「へ？うどんでっか」

「はい」

「何うどんしましよ」

「は？」

「何うどんしましよ、と言うとんですがね」

「え？だから、天ぷらうどん……」

「ほいきた。天ぷらうどんね。おーい天ぷらうどん追加……そやけどおにいさん、よう食べまんなあ。定食くうて、まだうどん食うんでっか」

「ちがいます」

「ちがう……？ そうか分った。うどん食うてから定食くうんやろ」

「いえ……」

「ちがう……。ははん、ほんだら 一緒に食べる……。あっち食うてこっち食うて、そやろ」

「違うんです。定食は食べません」

「て、定食くわん？なに言うとんのやもったいない。せっかく注文したのに、それ食わんちゆうのは、そりやもったいないでおにいさん。しかも店のものに悪いわ、せっかく腕にヨリかけて作った天ぷら定食やのに……注文だけして、食わんちゆうのは……」

「注文してませんけれど……」

「わーびっくり。な、な、なに？今、何言うた」

「……天ぷら定食は注文してないですけど」

「えっ、えっえっえ。ええーえー。にいちゃん、そりやないで。せっかく作らしといて注文してないとは何でっか、ええ、あんたこの店つぶす気だっか。えっ？あっ、おねえちゃん、おかんじょでっか。へいへいへい三百五十円です。え、へい、おおきに、百五十円おつり……はい。おお お、可愛いおてて……ええいチョン。あっ、おこわ。また怒りよる。あはははははははは、また来てや……おしりプリンプリン……あは あは、あはは。おいこら、にいちゃん。あんた、この店つぶす気だっか」

「いえ……」

「確かに注文したやろ、天ぷら定食……」

「いえ、あの、あ、はい……」

「そうやる。あたりまえやないか。おととと、待ってや、うどんができたさかいに。へい、お待ちどう、かやくうどん」

「え、いや、あの。天ぷら」

「天ぷら？…天ぷら定食はここにある やないか」

「はい、確かに」

「ようわからんやっちやなあ」

「だけど」

「だけど、何やねん」

「いえ」

「ほんまに、ようわからん男やわ。ごちゃごちゃ言わんとはよう食わんかい」

「はあ」

「ほんまに最近の若いもんは何を考えとんのか わからんわ。自分の言うた事に責任持たれへんのかいな。ズウタイばっか大きくなって、ほんま頭の中カラッポや。カラッポのスカラカンやで。はっきり言うて、はっきり言うてたよんない。自分の意志がはっきりせん。決断力がない。あんな男は女にもパカにされよる。だいたい苦勞を知らんからや。ええ学校出とんやるけど、いらん事ばっか覚えくさって、肝心なことは何も知らん。もっとしっかりせよ、ほんま。あほとちゃうんか……。おおい、にいちゃん」

「はっ」

「しっかりせえよ」

「……」

「あんな、あほな奴が明日の日本を背おていくとは、ほんま考えただけでもゾツとするわ。まあ、あいつは女にはもてんやるな。ええ服きて、ええ靴はいてしとうけど、やっぱ男は中身やからな。わしみたいに中身がないとなあ、ほんまあかんわ。それと、やっぱ優しさやなあ、やさしさ。男は、ほんま……」

「おあいそ」

「ほいほい。にいちゃん。え と、千三百円」

「あの」

「何？」

「千二百円とちがいますか」

「ま、また、あほ言いよる。天ぷらうどんが三百五十円。天ぷら定食が九百五十円や足したら千三百円やないけ。足し算もでけへんのか」

「いえ、あの、今、ぼくが食べたのはかやくうどんと、天ぷら定食なんですが」

「あ、あほ、あほ。おまえ天ぷらうどん注文したやろ、ちゃうか？」

「しました」

「こいつ、よう言うわ。天ぷらうどん注文 してって食べたんはかやくうどんやて」

「はい」

「おちよくつとんのか、ええ」

「……………」

「にいちゃんよ。あんまりからかうと、おっちゃん、しまいに怒るよ」

「……………」

「わかっとなのかい」

「……う……うう」

「何や、その顔は。ええ」

「う、……………う、う……」

「文句あるんかい。え、にいちゃん」

「う。……」

「何とかいえや」

「じゃか……」

「何やて、もっとはっきり……」

「じゃかつしゃい！」

「へ……」

「じゃかつしゃい言うとなじゃ、おっさん！！」

「へえ」

「ひとが、おとなしいにしとったら、つけあがりくさって。こら、おっさん」

「げ……そ、そんな。テーブルの上に足のせんでも」

「やかつしゃい。表へ出んかい」

「そんな大きな声ださんでも、おにいさん」

「だまれ、おっさん」

「はいっだまります」

「今、食べたんはなあ……」

「はい。おにいさんが食べたのは……」

「天ぷらうどんやのうて、かやくうどんじゃ」

「はいはい、どおりで」

「どおりで、何じゃ」

「かやくだけに、あんた、爆発しました」

おそまつ。

帰ってしまう宇宙人

銀色の円盤が地上に降りてきた。

どんな宇宙人が現れるのだろうか。期待と不安。

人々は、複雑な気持で円盤の扉が開くのを待った。地上では数十台のテレビカメラが、その扉にレンズを向けている。

宇宙人は狂暴かもしれない。ゴジラのような顔をしているかもしれない。

ひょっとしたら地球にはない兵器で地球人をみな殺しにするかもしれない。

やがて扉は開いた。

人々は大喝采を送った。宇宙人はやさしい顔をしていた。肌の色こそ違っているが、地球人と同じ形をしている。友好的な宇宙人に違いない。彼らと文化の交流ができるかもしれない。地球人はあらためて宇宙人に喝采を送った。

ところがどうだ、宇宙人は何やら叫び、あわてて扉を閉め、空の彼方へすっとなでいってしまったのだ。

それから何度も地球に円盤がおとずれた。

しかし、みんな同じ言葉を残して帰っていった。

宇宙人の残した言葉。地球の学者たちは、その宇宙語を研究した。人間の頭脳とコンピュータの頭脳を総動員させて研究は進められたが今 歩のところまで解明できない。

ありとあらゆる努力をした。ありとあらゆる情報をコンピュータに入力した。

何年もかかったが、ついに宇宙人の言葉が解明される日がきた。

「みなさん、お待たせしました。このコンピュータのボタンを押せば宇宙人のあの言葉が翻訳されて出てきます」

技術者はボタンを押した。

軽やかなプリンターの音がし、印刷された用紙が出てくる。

そこには、こう書かれてあった。

ワオー

ウチュウジンダ

ハヤク ニゲロ

記憶喪失

青年は記憶喪失の女性と知りあった。

彼女は自分の住所も親の名前も、自分自身の記憶さえわからない。

過去の一切を忘れてしまった彼女であるが、優しく魅力的な女性であった。

青年は彼女を好きになった。彼女も、私が頼れるのはあなただけ、と青年に好意を持つ。

恋がめばえ、めでたく結婚。

あまい新婚生活が過ぎ、何年かたったある日。彼女は足を踏みはずして階段から落ち、頭を強く打ってしまった。

またしても記憶喪失。

新しい自分の名前も夫の名前も忘れてしまった。

何ということだ、俺の顔も、俺が夫であることも忘れてしまうなんて。

彼は嘆き悲しんだが、いつまでもこのまま放っておくわけにはいかない。二人で旅行した時の写真を見せたり、思い出の場所へ彼女をつれていったりした。

しかし、だめだった。

彼は、思いきって彼女の頭を殴ってみたら記憶がもどるかもしれないと考えた。

それを実行した。

もっと早くこれに気づけばよかった。女の記憶は完全にもどったのである。

「あら、ここはどこ？ 私は今まで何をしていたのかしら。そして、あなたは、だれ？」

彼女の記憶は "完全"にもどった。

Web の糸

ある日の事でございます。

世界ネットワーク管理者は世界中の家庭や個人につながっているディスプレイを何気なく見ていらっしまいました。

ディスプレイには検索サイトがあり、個人のブログがあり、女性の裸体があり、情報を騙し取ろうとする悪人のサイトもあります。世界ネットワーク管理者は極楽にいらっしやるお釈迦様のように世界中の人のやっていることとお見通しなのです。

管理者は朝の早くから女性の裸をニヤニヤとして眺めていましたが、お仕事のひとつである地獄サイトを閲覧されました。ネットワークで犯罪を犯したものが収容されてる地獄サイトという仮想空間でございます。

仮想空間も収容されている悪人たちはこのネット社会においてネットワークが一切使用できず現実空間でも一切の情報をえられないという重い刑をうけておりました。

世界ネットワーク管理者からは地獄サイトの一人ひとりをはっきりと見えるのでございます。すると、そのサイトの底に、カンダタという男が一人、ほかの罪人といっしょにうごめいている姿が、お眼に止まりました。

このカンダタという男は、銀行の口座番号を盗んだり、善良な市民のブログを閉鎖させたり、いろいろ悪事を働いた大悪人でございますが、それでもたった一つ、よい事をいたした覚えがございます。

と申しますのは、ある時この男が深い林の中を通りますと、小さなクモが一匹、路ばたをはって行くのが見えました。

そこでカンダタは早速足を挙げて、踏み殺そうと致しましたが、「いや、いや、これも小さいながら、命のあるものに違いない、その命をむやみにとると云う事は、いくら何でも可哀そうだ」と、こう急に思い返して、とうとうそのクモを殺さずに助けてやったからでございます。

管理者は地獄サイトの様子をご覧になりながら、このカンダタにはクモを助けた事があるのをお思い出しになりました。

そうしてそれだけのよい事をしたむくいには、出来るなら、この男を地獄サイトから救い出してやろうとお考えになりました。

幸い、ネットワークの利用状態見ますと、まだまだ回線がありあまっておりました。

管理者はその Web の糸をそっとお手にお取りになって、その回線を地獄サイトにおつなぎになりました。

[2]

こちらは地獄サイト仮想空間の血の池で、ほかの罪人といっしょに、浮いたり沈んだりしていたカンダタでございます。

何しろどちらを見ても、まっ暗で、たまにそのくら闇からぼんやり浮き上っているものがあるとしますと、それは恐い針の山の針が光るのでございますから、その心細さと云ったらございません。その上あたりは墓の中のようにしんと静まり返って、たまに聞えるものと云っては、ただ罪人がつくため息ばかりでございます。

ここへ落ちて来るほどの人間は、もうさまざまな地獄サイトの責苦に疲れはてて、泣声を出す力さえなくなっているのでございます。

ですからさすが大悪人のカンダタも、やはり血の池の血にむせびながら、まるで死にかかったカエルのように、ただもがいてばかりおりました。

ところがある時の事でございます。

なにげなくカンダタが頭を挙げて、血の池の空を眺めると、そのひっそりとした暗の中を、遠い遠い天上から、銀色のネットワークビームが、まるで人目にかかるのを恐れるように、一すじ細く光りながら、するすると自分の上へ垂れて参るのではございませんか。

カンダタはこれを見ると、思わず手をうって喜びました。

この Web の糸にすがりついて、ネット回線を手に入れれば、きっと地獄サイトからぬけ出せるのに相違ございません。

いや、うまく行くと、世界ネットワーク管理室へ入る事さえも出来ましょう。

そうすれば、もう針の山へ追い上げられる事もなくなれば、血の池に沈められる事もある筈はございません。

こう思いましたからカンダタは、早速その Web の糸を両手でしっかりとつかみながら、一生懸命に回線信号を解析し始めました。

元よりネットワーク犯罪者の事でございますから、こう云う事には昔から、慣れ切っているのでございます。

しかし手元にノートパソコンがあるわけでもないですから、いくらあせって見た所で、容易に解読はできません。

そこでカンダタは Web の糸をのぼっていくことにしたのです。この先には世界ネットワ

ーク管理室があるのに違いないとおもったのでございましょう。

ややしばらくのぼるうちに、とうとうカンダタもくたびれて、もう一たぐりも上の方へはのぼれなくなってしまいました。

そこで仕方がございせんから、まず一休み休むつもりで、糸の中途にぶら下りながら、遥かに目の下をながめました。

すると、一生懸命にのぼった甲斐があって、さっきまで自分がいた血の池は、今ではもう暗の底にいつの間にかくれております。それからあのぼんやり光っている恐しい針の山も、足の下になってしまいました。

この分でのぼって行けば、地獄サイトからぬけ出すのも、あんがいわけがないかもしれません。カンダタは両手を Web の糸にからみながら、ここへ来てから何年にも出した事のない声で、「しめた しめた」と笑いました。

ところがふと気がつきますと、Web の糸の下の方には、数かぎりもない罪人たちが、自分ののぼった後をつけて、まるでアリの行列のように、やはり上へ上へ一心によじのぼって来るではございせんか。

カンダタはこれを見ると、驚いたのと恐しいのとで、しばらくはただ、バカのように大きな口を開いたまま、眼ばかり動かして居りました。

自分一人でさえ切れそうな、この細い Web の糸が、どうしてあれだけの人数の重みにたえる事が出来ましょう。

もし万一途中で切れたとしましたら、折角ここへまでのぼって来た自分までも、元の地獄サイトへ逆落しに落ちてしまわなければなりません。そんな事があつたら、大変でございせん。

が、そういううちにも、罪人たちは何百となく何千となく、まっ暗な血の池の底から、うよよと這い上って、細く光っている Web の糸を、一列になりながら、せっせとのぼって参ります。

今のうちにどうかしなければ、糸はまん中から二つに切れて、落ちてしまうのに違いありません。

そこでカンダタは大きな声を出して、「こら、罪人ども、この Web の糸はオレのものだぞ、お前たちは一体誰にきいて、のぼって来た、下りろ、下りろ」とわめきました。

その途端でございせん。

今まで何ともなかった Web の糸が、急にカンダタのぶら下っている所から、ぷつりと音を立てて切れしました。ですからカンダタもたまりません。

あっという間もなく風を切って、コマのようにくるくるまわりながら、見る見る中に暗の底へ、まっさかさまに仮想空間へと落ちてしまいました。

後にはただ Web の糸・・・ネットワークビームが、きらきらと細く光りながら、月も星もない空の中途に、短く垂れているばかりでございます。

[3]

管理者は世界ネットワーク管理室のディスプレイをのぞき、この一部始終をじっと見ていらっしやいましたが、やがてカンダタが血の池の底へ石のように沈んでしまいますと、悲しそうなお顔をなさりながら、また女性の裸をながめ始めました。

自分ばかり地獄サイトからぬけ出そうとするカンダタの無慈悲な心が、そうしてその心相当な罰をうけて、元の仮想空間地獄へ落ちてしまったのが、管理者から見ると、浅間しく思えたのでございましょう。

しかし世界ネットワーク管理室のコンピュータは、少しもそんな事には頓着いたしません。

あいかわらず、その銀色に光る筐体は LED をチカチカ点滅させております。

世界ネットワーク管理室ももう昼近くなったのでございましょう。

管理者はネットで牛丼をご注文になられました。

調査員

「わあ！ いったいおまえは誰だ」思わずおれは叫んでしまった。

テレビの11PMも終わったし、そろそろ寝よか、それとも深夜映画でも見ようかとつまらん事に悩んでいた時「こんばんは」と玄関で声がした。こんな夜中にいったい誰が来たんかいなとブツブツ言いながらもドアを開けたらそいつがいた。

「こんばんわ、わたくし調査員でございます」

「ちよ、調査員？」

「はい」

「何の調査員か知らんがこんな夜中に、しかもその格好はなんだ」

そいつは銀色でぶかぶかのツナギのような服を着ていて、胸のあたりには見たこともない文字が印刷されている。真っ赤な長靴に真っ黒な手袋。カルピスみたいな水玉模様のベルト。なんという色のとり合わせ。しかも、そのベルトは腹巻みたいに太い。

「え、この服のことですか、おかしいですか」そいつは両手を腰のあたりにあてがってクルリと一回転してポーズを作ってにっこり笑った。

「ああ、はっきり言っておかしい。それはまるで宇宙服だ」

「そうですよ」

おれは少しめまいがした。そんなことはおかまいなしにそいつはしゃべりつづけた。

「これは、わたくしどもの制服なんですよ。このベルトは今年の流行りですね。まあ、うちの会社もイメージチェンジをしようとい最近このユニフォームを採用することになったんです。いいでしょ、この背中からお尻にかけてのフワツとしたライン。ね、ね。しかもね、性能がまたいいんですよ」

「性能？ ……なんで服に性能が必要なんだ」

「だから言ったでしょ、これは宇宙服だって。この服を着てなけりやこんな水素の少ない星では生きてられませんよ。わたくし達は皮膚呼吸をしますからね。この服には水素と酸素がたっぷり入ってるんです。そう、水素と酸素を取り入れて水を廃せつするんですね。この新しい制服を着ていると、あなた達の地球時間でだいたい40日くらいは生活できますからね。あはは、こんな話しをしに来たんじやないんだった。わたくしは調査員なんだから」

そいつは「さあ仕事、仕事」と言いながら長靴を履いたまま家の中へ上りこんで行った。

そのハチャメチャで非常識な男は勝手に台所へ入ると、食卓の椅子にすわりこんで手帳らしきものを出した。そして、なにやらメモをとり始めた。わけの分からないケツタイな

文字を2～3行書くと、おれにこんな質問をした。

「あなたはオスですか、メスですか？」

おれは泣きたくなった。

こんな夜中に見知らぬトンチンカンな男がひょっこり訪ねて来て、のこのこと靴のまま上り込む。そして、ヤブカラボウにこんなことを質問されてみる。

この世の常識とかモラルとかいったものの基準が崩れてしまって、正しい事と正しくない事の区別が分からなくなってしまう。この男が異様なのだろうか、それとも、おれの性格が暗すぎるのだろうか。この男のしゃべっていることが普通ではないと思うのはおれの知識不足からきているのだろうか。この非常識な男を追い返すことが何かしら、すごく非常識ではないかと思ってしまう。

「はい、私はオスです」

なぜか、おれは丁寧にごう答えてしまった。

「ははあ、あなたはオスですか、そうですか」やつはメモをとりながら話つづけた。「地球人は成人するとオスとメス一対でフーフしますね」

「はい、フーフします」

「あなたは成人ですか」

「はい」

「そうですか、それはよかった。するとこの巣にはメスもいるんですね」

「巣じゃありませんよ、カラスじゃあるまいし。家とってくださいよ、家と。それに成人するとみんな結婚して夫婦になる訳じゃありません。中には独りで暮らしている人もいます」

「巣じゃなくて家。そうですか。成人してもフーフしない個体もいる。ははあ、そうですかメモしておきましょう……で、あなたはフーフしていますか」

「はあ、家内はおりますが」

「え、そうですか、そうですか、やっぱりこの巣、じゃなくて家にはメスの人間もいるんですね」

「はあ」

「どこにいますか」

「二階で寝てます」

「あ、そう、それじゃ……」男は手帳を持って立ちあがった。

「帰るんですか、帰るんですね」

「いや、二階にいるメスを見てきます」

「わあぁー、やめてくれ」

おれはとうとう泣いてしまった。

ビールびんを掴み、ラッパ飲みでいっきに飲みほした。口の回りがピチヨピチヨになった。家内は「この非常識人間」というような顔でおれを見た。ああ、おれはこの上もなく非常識な人間に違いない。

「ははあ、人間のオスとメスでは性格がずいぶん違うのですね。オスは暗くて非常識だけど、メスは美しくて優しい」

「ま、うれしい。美しくて優しいだなんて。ま、どうぞどうぞ、おビールどうぞ」

「あ、どうもありがとうございます。それよりもメスの方、わたくしは仕事でここにやってきたのです。ゆっくりとこんな飲み物を飲んでばかりいられません。ちゃんと仕事をして帰らなければ上司に叱られます。さ、さ、早く服を脱いでください。調査をしなければなりません」

「はい、それじゃ脱ぎましょうね」

家内は少しふざけて、パジャマの裾を上にはずらして、もうちょっとで胸が見えそうになるくらいまで上げた。家内は寝るときにはブラジャーをしていない。

「わ - ああああ、やめろ」

「冗談ですよ、あなた」

「ばかやろう、じよ、冗談でもそんなことするな」

「いやあねジョークの分からない人は、なんなら下を脱ぎましょか」

家内は親指をパジャマのズボンのゴムにひっかけて10センチほどずらしてみせた。恥毛が5本ほど見えた。

「ぐわー。するな」

おれは、男の前にあったビールを驚掴みにして、またもいっきに飲みほした。首から胸にかけてピチヨピチヨになった。

「あははは、ひっく、そうだそうだ、おれは、ひっく、非常識な男だ。付き合いの悪い、暗い、くら - い人間だ。冗談もね、分からんのよ。それがどうした。それがどうした。こら、もう一本ビール持って来い」

おれの頭はモウロウとしてきた。

いつの間にか家内は男の横に椅子を並べてすわっていた。彼女も相当酔っぱらっている。ときどき男の肩にしなだれかかったりしているではないか。

男はひたすら家内の体を点検してはメモをとっている。テーブルはビールびんでいっぱいになった。おれは、その二人をただ上目づかいて見ているだけであった。

「ははーん、だいたいメスの体が分ってきました。それでもやっぱりこの布っきれが邪魔になりますね。えーとこの服の構造はと……この胸のボタンを、この穴から抜きとると……ははあ、外れましたね。この要領でもうひとつ、よいしょと、もうひとつ、……。なるほど、これで脱げますね。よいしょ。はい脱げました」

おれの目の前で家内の乳房がポロンとまろび出た。男はメモをとると、今度はパジャマの下を脱がせはじめた。

「え - と、これは逆さのY字型をしていますから、ここを引っ張るとスポンと脱げますね。よいしょ、あれ、ちょっとお尻を浮かせて下さい。そうそう上手です。はい。あらら、もう一枚あるんですか、何のためにこんな薄いのをお尻につけてるんですかね。はいはい、これも脱いじゃいましょう。すいません、もう一度お尻をちょっと浮かせて……1まい、よろしい、これでスッポンポンになりました」

やつはついに妻の下着までもはがしてしまった。

酔っ払っているせいか、この男の魔力のせいか家内の目は焦点が合っていない。たぶんおれだってそうなんだろう。宇宙人かなにか知らんが、いずれにしても初対面のこの男のすぐ横で妻がすっ裸になっている。それを、夫であるおれが、なぜ黙って見ているのか自分でも分からない。たぶん、そんなにたいした出来事ではないんだろう。世の中にはいくらでもある事なんだ。

家内は焦点の合わない目をおれの顔に向けて、ニコッと笑った。自慢気な額だった。脳みそのほんの片隅でくやしいと思った。だが、その嫉妬もすぐどこかに消えた。妻が幸せであって、なぜいかん。そうだ。妻の幸せはおれの幸せ。ああ、なんてこの世はすばらしいんだろう。

「これこれ、オスのかた。あなたも早く脱いで下さいよ。わたくしは忙しいんですから。太陽が昇るまでに宇宙船に帰らなければならないんですから。地球の日差しは強いんですからね。さあ、早く。わたくしはこの人の調査を続けますから、あなた自分で脱いで下さい。さっ、早く」

「はい、すいません」

「ははあ、地球人のメスは服をはがすとずいぶん凹凸があるんですね。なんですかね、この、胸のあたりのふくらみは……ずいぶんと軟らかいものですね。この先っちょのポッチンは……やっ、”あはん”と言いましたよ。ちょっとつまんで……ややややっ、どうしたんですかこの人。そんなに抱きつかないでくださいよ。メモができないじゃないですか。ふくらみが二つあるけど、なぜなんだろうね。こっちもつまんでみましょか……わっ、また抱きつくう。もう。なんだろうねこの軟らかいプリンとしたものは。ああ、地球人は難しい……」

「あの、すいません」

「なんですか」

「あの、服を脱ぎましたんですけれども」

「はいはい、それじゃこっちに来なさい。ここに二人ならんで下さい」

おれと家内はテーブルからはなれて床の上にすわった。すっ裸のままである。

「それでは、オスとメスの構造の違いを調査してみましょう……ややっオスには胸のふくらみがありませんな、ポッチンはどちらにもあるけれども……えっ？なんですか、はあはあ、これはチクビというんですか。さすが地球人のメスさんは優しい。教えてくれてどうもありがとう。メモしておきましょう。チ、ク、ビ……と、……ええ - と、それから……やや、やややや。これはなんですかキュウリの腐ったようなものは、こんなものメスには無かったはずだ。どれどれ、ふむ、やっぱり無い。ええと、地球人のオスにはキュウリの腐ったようなものが股にぶらさがっている……と、メスには無い……と。なるほど、なるほど。だいたい分かってきましたぞ。それではと、写真をとって おきましょう。はい、いいですか。あん、そなんじゃだめ。オスとメスの違いがはっきりと分かるようにしなけりやだめでしょ。もっと脚をひろげ……そうそう……うわ、大胆……え、いやいやなんでもありません。わたくしは調査員です」

フラッシュが光った。パシャ、パシャとシャッターをきる音がする。

「さあ、もうすぐ終わりですからね。がんばって下さいよ。それでは今から地球人の生殖行為の調査を始めます」

「……」

「……」

「どうしたんですか、ほけ - として。せ、い、しよ、く、こ、う、い。分かりませんか……え、分かりますね。それじゃどうぞ」

「……」

「……」

「これ、ぐずぐずしないで早くしなさい。時間がありません。はいスタート！！……そうそう、その調子」

おれは何がなんだか分からないまま家内の肩を抱きよせた。家内もその気になっていた。何度も何度もフラッシュが光ったような気がする。

「そうそう、なかなかいいですよ。はいはい、やや、上に乗……それから脚を……なるほど。な、なんと、そんなにしたら……うわ、今度は……手が……うわ、からまって、えっ、そんな事もやっちゃう……お尻に……あらら、なんと逆になって……そこが、そんなに……もう、大変。キュウリが……。そこんどこ、あはは、すみませんよく見えないんだけど……。……わっ、見えた。まさか、そんな……すごい……わっ。……おっ……なんと。……あれ、どうしたんですか。あの、もう終わりですか……こまったなあ。えっメスの方はまだいけますか、それじゃわたくしが代わりにやりましょか。これこれ、オスのかた。タッチ交替。あんたこのカメラを持って、いいですか。それじゃ失礼」

「ひえ - 」

本屋の店先でおれは大声を出してしまった。あの宇宙人がおれの家へ来てから一か月ほどたってただろうか。

会社の帰り、おれも好きなほうだから、いつも買ってるエロ本を手を取った。そのエロ本の表紙はおれの家内の写真ではないか。「へへへへ」次には笑い出してしまった。すっ裸で、とんでもないポーズをしてる。そして右下には『激写・キッチンの乱交！！』と金文字で印刷されていた。

ページをめくって、またもおれは叫んでしまった。「ぐわー……へへへへ」次には笑い出してしまった。この雑誌の半分はおれと家内の写真でうまってる。ときどき、あの宇宙人と家内がからみ合っている写真もあった。

それから三日後、おれは社長室に呼ばれた。

社長は言った。「よくやるねえ、君も」

笑っていた。

おれも笑った。

へそ

あき子はいい女だ。

顔だちも性格もおれにピッタリだ。結婚したいと思っている。あき子もそう思っているはずだ。

ところが、どうしても結婚にふみきれない理由があるのだ。あき子は、おれが悩んでいる事に気づいて何回となくおれから理由をきき出そうとしたが、情けないやらばかばかしいやらで今まで何も話せなかった。実は、おれにはへそが無いのである。

へそなどなくってもおれは人間であり、立派に男である。しかし、この世に生れてから何の役にもたない穴っぽこも、こういう場合、人生の大きな障害となる。

おれが、自分にへそが無い事を始めて知ったのは小学校五年生になったばかりの春だ。それまで全く気がつかなかったのだから、おれの頭は子供の頃からあまり良くなかったみたいだ。

その日は学校が休みだったから、たぶん日曜日だったのだろう。朝からおやじも、おふくろも妙に無口であった。子供心にも何となくいつもと様子が違うというのが判った。夕食の時も三人はテレビを見つめたまま、だまって食べつづけた。

突然おやじが低い声でしゃべりだした。

「実はなあ健一。おまえはタマゴから生れたんや」

急におかしな事を言い出した。頭がおかしくなったのではないかと、おれはおやじの顔を見た。おやじの顔は真剣であった。

口はへの字の形をしていて、力が入っている。

「何か言うたか」

「言うた。おまえはタマゴから生れたと言うたんじや」

おれは笑った。大笑いした。あたりまえである。これ以上笑うと腸捻転をおこすというくらいに笑った。

もう笑えんわいと、おやじの顔をチラッと見たら、やっぱり口はへの字であった。テレビはニュースをやっていた。アナウンサーの声が、まるでエコーをきかせたようにきこえてくる。

どうもおかしい。ジョークにしては芝居がうますぎる。そういえば、いつもこの時間は食器を洗ったりしているはずのおふくろがいない。どこかべつの部屋へいってるようである。おれは何を言ったらいいのかわからないので、話しを変えようとした。「おかあさん、

どこへいったん？」

「家におる。それよりおまえ、おとうさんが今、言うた事きこえたんか」

「きこえた。ぼくはタマゴから産まれたれたとか」

「そうじゃ」

「なんのこっちゃや、もしぼくがタマゴから生れたんやったらヘソが無いはずやないか、ぼくにはちゃんとヘソがあるもん」

「無い」

「あるわ」

ばかげているとは思ったが、おれはシャツを胸までまくり上げて腹を出した。腹のまんなかにはちゃんとヘソはあった。

「ほら見てみい、ちゃんとあるやないか」

「それはヘソやない。うそや思たらシンナーでふいてみい、とれてしまうはずや。そのヘソはマジックで書いてあるんやさかい」

おれは、もうすぐおやじが大笑いしてどうやおもしろかったやろ、おまえもこんなアホな話しによくだまされたなあといってくれるのを待っていたが、おやじの顔はますます険しくなった。

「そんなん、うそや」

もちろん、おれはおやじの話しを信じたわけではなかったが、自分のヘソを人差し指で強くこすった。

その瞬間、腰の力が抜けていくのが自分でも判った。ヘソがとれて指に着いたのだ。そこへ、おふくろが飛び込んできた。ただ、わあわあと泣くばかりである。家の中は、しばらくおふくろの泣き声だけがひびいた。やっと、泣きやんだおふくろは焦点の合わない目をしてボソボソとしゃべり出した。

「健一、おまえは今おとうさんが言った通りタマゴから生れたんや。ほんでヘソも無いんや。おなかの黒い丸は、毎晩おとうさんがおまえが寝てる間にマジックで書いとったんや。学校で身体検査がある前の晩は特に念いりに書いてもろた。それから、おまえが生れた時の写真があるやろ、おまえも見たことのあるやつや。あの写真にはちゃんとヘソがあるけど、あれもおとうさんが後で写真にボールペンで書いたもんなんや」
あまりのショックにおれは二週間ほど学校を休んだ。しかし、子供というのはどんな事にもすぐ順応するらしい。おれは、自分で自分の腹にヘソを書くようになり、いつもと変わらず学校へ行くようになった。

あれから二十年たった。

どうしても、あき子との結婚にふみきれないのはこんな理由があるからだ。結婚してか

らも密かに毎日ヘソを書くわけにもいきまい。しかし、いつまでもこうしてはいられない。無情にも歳というのは放っておいても増えていく。

おれは決心した。

あき子に総てを打ち明けよう。デートの帰り道。おれはそれを話すチャンスを待っていた。何も知らない人してみればとんでもない話しである。そう簡単に話せるもんじやない。二人共、夜道をだまって歩いていたが、ふとあき子と目が合った。

信じてくれるかどうか判らないが、おれは一気に総てを話した。

意外な返事が返ってきた。

「知ってるわよ、そんな事」

「何だって、そしたらおれにヘソが無いという事を前から知っていたというのかい」

「ええそうよ。健一さん、あなたの右の眉毛の上にホクロがふたつ並んでいるでしょ」

おれには確かに右眉の上にホクロがふだつある。

「そういう人は、みんなおヘソが無いのよ」

「本当かそれは」

「もちろん。現にあなたがそうでしょ」

「そりゃそうだが……」

こういう具合に話しが進むとは夢にも思わなかった。まあどっちにしてもおれにとって悪い事ではない。

「それでね健一さん。そのホクロが右の手の平にふたつある人はねえ……」

「なんだい、君の右手にはホクロがふだつあるけど……」

「ええ、そうよ。私の手の平にはホクロがふたつあるわ」

「それがどうしたんだい」

「そんな人はね、おヘソもふたつあるんです」

そう言ってあき子は右手を出した。

その手の平にはいつも見なれた小さなホクロがふたつ可愛く並んでいた。

童話

むかしむかし ある国に ベン という男がいました

彼は ジョデキ という女と結婚し ふたりの子供ができました

ひとりめは男の子で バルトク という名前です

二人目は女の子で ソガデル と名付けました